

2021年度 関西学院幼稚園 学校評価を終えて

関西学院では、幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを活かし、お互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施しています。併設する学校の教員に、専門的な視点からの意見を聞くことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。この度、関西学院幼稚園の学校評価が、学院総合企画会議（短大・各学校内部質保証部会）において承認されましたので公表いたします。

関西学院幼稚園は、子どもを中心に考えたキリスト教主義による幼児教育を実践しています。そこで、2021年度の学校評価におきましても、関西学院のスクールモットー “Mastery for Service” についての質問を、「学院共通項目」として、そして「キリスト教主義教育」を評価項目に選定しました。また、文部科学省の「幼稚園における学校評価ガイドライン」に沿った項目としては、「教育課程・指導」「教育環境整備」「保護者との連携」、そして、2020年度の「保健管理」と「新型コロナウイルス感染症対策」の評価項目を一体化し、園児の安全対策をとりつつ行う教育の充実の模索のため、「安全管理（新型コロナウイルス感染症対策）」を新たに設定しました。

評価の実施に当たっては、各項目について保護者・教員にアンケート調査を行い、関西学院大学教育学部教員、聖和短期大学教員による保育実践・施設の参観、意見を聞くことによって客観性を確保しました。アンケートの回収率は、保護者 87.3%（192人/220人中）、教諭 100.0%（15人/15人中）となっております。

今年度は、「教育理念・使命・目標」「評価項目」を説明し、各評価項目で「目標」を立て、「具体的な取組の状況とその効果に対する評価」を行い、「今後の方策」を示し、自己点検・評価としました。また、関西学院大学教育学部教員、聖和短期大学教員の評価者に普段の保育を参観していただき、ありのままの本園の教育を知っていただき、その方々のご意見も合わせて関西学院幼稚園の学校評価としてまとめています。

関西学院幼稚園は学校評価を通じて、自らその課題を探り、その課題に向き合い、誠実に対応し、より質の高い保育を目指していきます。

今後も一人ひとりの子どもたちが、愛されている自分を実感し、友だち・保育者と共に認め合い、力を合わせることの楽しさ、喜びを味わうプロセスを大切にするキリスト教主義教育の研鑽に努め、保護者・学校関係者・地域の皆様と共に連携しながら、より良い幼児教育の実践を行いたいと考えております。今後どうぞよろしくお願いたします。

2022年3月18日
関西学院幼稚園
園長 赤木 敏之

学校評価

教育理念・使命・目標

< 建学の精神—「幼子をキリストへ」 >

聖書におけるイエス・キリストによって示された教育観・子ども観をもって、キリスト教主義による教育・保育を実践している。子どもたち一人ひとは、神様に愛されている存在として、慈しみ育てることを使命としている。子どもを中心に据えた教育・保育は、一貫した流れの中で受け継がれている。

< 教育方針 >

○子ども一人ひとりが、イエス・キリストによって示された神様の愛に気づき、自らがかけがえのない存在であることを知り、喜びと感謝をもって過ごす。

○お互いの個性や多様性を認め合い、自主性、創造性を発揮して共に育ちあう。

○神様の創造された自然の中で心と体を存分に使って遊び、健康的な心身を育み、豊かな感性を培う。

これらの教育方針に基づいて、教員は神、イエス・キリストとの交わりによって支えられ、意図的、継続的、反省的な努力、配慮をもって子どもたちと共に学び、成長する存在でありたいと願って保育を行っている。また、遊びを中心とした保育を実践し、子どもたちの心の育ちを支え導く援助を心掛けている。

2021 年度の評価項目

- ・キリスト教主義教育→ 本園の教育の根幹となるため毎年の評価項目に選定。
- ・教育課程・指導→ 重要項目であり、経年変化を測るため毎年の評価項目に選定。
- ・教育環境整備→ 園児が遊びを通して学ぶ空間としての環境は重要であるため毎年の評価項目に選定。
- ・保護者との連携→ 園児の健やかな育ちのためには保護者との連携は不可欠であるため毎年の評価項目に選定。
- ・安全管理（新型コロナウイルス感染症対策）→2020 年度の「保健管理」と「新型コロナウイルス感染症対策」の評価項目を一体化し、園児の安全対策をとりつつ行う教育の充実の模索のため、新たに選定。

2021 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教保育の理念の共有、キリスト教保育の根幹である愛情を感じられる教育の実践】	自己評価	B
目標	○教員間でキリスト教保育の理念の共通理解に努める ○一人ひとりの園児の発達・個性を把握して、子どもたちが愛されていると感じられる保育をする		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	(具体的な取組の状況) ・教員は、神様から命・個性を与えられた園児一人ひとりのあるがままを受け止め、愛情深いキリスト教保育を行っている。 ・教員は、園児自らがかけがえのない存在であることを知り、お互いの個性や多様性を認め合いながら共に育ちあうことができるように働きかけている。 ・教員は、園児一人ひとりの個性や発達を理解し、さまざまな遊びや活動に主体的に、喜びをもって取り組めるように個々に応じた援助を行っている。 ・教員は、園児の成長を捉える際に「できる・できない」といった目に見える評		

	<p>価や結果だけに偏らないように気を付けている。意欲、達成感、葛藤といった心の変化や内面の育ちに目を向け、その過程を大切に見守りながら援助している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員は、園児が自分のことだけではなく周りの友達や家族、他者を思う関わりを大切に考えられるように、教員自身の姿や振る舞いから働きかけている。延いては関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成へとつながるよう、“Mastery for Service”の基礎となる心の教育を大切にしている。 ・日々の保育の中で、各クラスで毎日礼拝を行っている。身近な自然物や自然現象から神様が与えてくださる恵みに気づき、喜びと感謝をもって祈る時を大切にしている。また、友達や家族、他者を思っの祈りも大事にしている。礼拝で語った聖書の話の内容や、園児と共に考え、話し合ったエピソードを、園からの配布物や降園時の伝達で保護者の方へお伝えし理解を深めてもらえるよう努めている。 ・土曜日には各学年ごとに保育室、ホール、聖和キャンパス内のダッドレーチャペルを使用して月2回（年間を通して年少組 17 回、年中組 18 回、年長組 18 回）礼拝を行っている。聖書話を語り、さんびかを歌い、献金を捧げ、共に祈る時間をもっている。平日には、年長組は学年で集まり、年中組・年少組は各クラスで、聖書話を聞く礼拝を行っている。 ・11 月には講師に聖和短期大学の小見のぞみ先生を招聘し、人数を制限した形でクリスマス準備保護者会を開催する。感染予防対策を講じながら年長組は12月に隔週でクラスごとに保護者の方が参加できる礼拝を3回行った。 ・クリスマス礼拝では、年少組・年中組は保育室で各クラスごとに親子で礼拝をすることができた。年長組は、ページェント（降誕劇）による礼拝を保護者の方と共に守ることができた。制限のある中であつたが、園児が家族と共に礼拝を行うことでクリスマスについての理解を深めてもらう機会がもてた。 ・キリスト教保育連盟の刊行物「ともに育つ」を保護者に配布し、キリスト教保育の理解を深められるようにした。 ・教員の学びと理解のために、キリスト教保育連盟から刊行されている「キリスト教保育」を年間を通して全教員に配布した。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケート、問3「幼稚園はキリスト教保育の考え方を、保護者と共有している。(日々の保育の伝達、礼拝、保護者会、手紙等)」では全体の71.2%が「強くそう思う」と回答している。この結果より、保護者からキリスト教保育について概ね理解が得られていると考えられるが、この数年で「強くそう思う」は減少傾向にあり「どちらかといえばそう思う」の割合が高まってきている。現状に留まらず、今後もキリスト教保育の理解につながるよう保護者への伝達が必要である。 ・教員アンケート、問1「教員は、キリスト教保育の理念を共有している。」について、86.7%が「強くそう思う」と回答しており、昨年度の学校評価を踏まえてキリスト教保育について教員同士で共通理解ができるように対話を重ねてきた結果が表れている（前年比 24.2%増）。引き続き、研修・会議における教育理念を共有する場づくりや、経験差による理解の相違を防ぐための細やかな打ち合わせ、省察を行う必要がある。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キリスト教主義教育に関する理解が得られるように、家庭通信（園児の姿・園として大切にしている視点等）や園児連絡アプリの活用、日々の保護者とのや

	<p>りとりを引き続き丁寧に行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感染予防対策に講じながら、保護者の礼拝参加の機会を設ける。 ・クラス、学年ごとの省察を教員全体で共有し、行事の持ち方や園児一人ひとりへの援助方法からキリスト教主義教育に関する共通認識を深める。 ・新任教員へのサポート、教育理念を共有する場づくり（研修）。 ・園児一人ひとりが愛されていると感じられるような保育の在り方について現在の構成員で考えを出し合い、教員全体で作りに上げる幼稚園の雰囲気、教員自身の立ち振る舞い方や園児への関わり方について確認する機会を作る。 ・教員で聖書を読む機会を設け、核となる言葉を保育者自身が意識し、心の教育につながるよう園児の発達に合わせた内容で保育の中で丁寧に語る。 ・現在に至るまでの本園のキリスト教保育を踏襲しつつ、今の園児に合わせた新しい発想を取り入れる中で、歴史的に何が大事にされてきたのかを振り返る機会を作る（次の世代へ継承されていくように努める）。 ・キリスト教保育を実践している園の教員、保育士との情報交換を通して本園の教育理念や保育実践を多角的に捉え考察する。
--	---

評価項目 【テーマ】	教育課程・指導 【各領域に主体的に取り組む姿勢を培う援助】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○園児が自律的な精神を養い、何事においても意欲的に取組めるように援助する ○園児が集団の中で、互いに違いに気づき、理解し合えるように援助する 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画、学年毎の月案、クラス毎の週案、日案を作成する上で、園児一人ひとりの発達段階や自主性の育ちなどを省察している。また、協調性や社会性を育み、共にいる喜びを感じられる活動ができるよう行事や遊びについても再考し実践した。 ・年齢や発達に合った教材を整え、園児が自主的に物的環境に関われるようにしている。また、教員は人的環境として、興味関心を深め主体的に活動を展開していきけるように援助を行っている。 ・各学年の活動について、ねらいや発達、経験などを省察し、入園から卒園までの保育の中で成長が積み上がっていくように努めている。 ・教員は、園内研修やキリスト教保育連盟、兵庫県私立幼稚園協会などの研修にオンラインで参加し、保育の省察を行うとともに、キリスト教主義教育への理解を深めている。援助や活動などの技術的な部分に留まらず、園が大切にしてきた歴史や経緯を知り、それらを踏まえた上で必要な援助や適切な関わりについて話し合っている。 ・教員は、園での取組やねらいなどを保護者と共有するために、降園時に日々の活動や園児の姿、それらに付随した願いを伝えている。また懇談会では、保護者の考えや願いも共有し、より具体的に園児が集団での生活をおくる中で育まれる力や成長、変化などを共有している。 <p>（取組の効果に対する評価）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートからは、問6「幼稚園は、子どもたちの育ちに合った保育プログラムを実践し、個人に添った援助を行っている。」に「強くそう思う」と答えたのが 59.2%（前年比 5.1%減）、「あまりそう思わない」が 4.2%（前年比 1.2%増）となった。この結果は、感染対策の中で保護者が保育室に入る機会が減っていることや、保護者へ話をする際に、的確に伝えられていないことなどが考えられる。 		

	<ul style="list-style-type: none"> ・教員アンケートからは、問3「幼稚園は、園児一人ひとりの興味・関心を高め、主体的・意欲的に活動できるように保育をしている。」に、「強くそう思う」の回答が86.7%（前年比17.9%増）となった。また、問4「幼稚園は、園児の育ちに応じた保育プログラムを実践し、個人に添った援助を行っている。」に関しては「強くそう思う」の回答が80.0%（前年比5.0%増）となった。これらの結果は、園内研修や日々の教員間の話し合いなどを通して、個と集団の両面を意識し保育を行う意識が浸透してきた表れであると考えられる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も若手教員が増えることが予想できる。研修や日々の教員間の話し合いなどで、教育課程・指導について理解を深めることができるように努めていく。また、新任教員から見て疑問に思うことや提案なども汲み上げ、園で常態化していることがないかも含め保育を省察し、研鑽していく。 ・保護者が保育室に入ることによって活動の展開などを見て感じられていたことが、感染対策から難しい状況となった。また、園児の様子を保護者へ伝達する際に、より具体的に説明したり、実際に取り組んでいるものを見せたり、園児連絡アプリを活用し配信するなどして、写真や動画などでも理解を深められるようにする。 ・アンケートからは、教員が高く評価している部分が保護者からは低評価である結果となった。保護者とのコミュニケーションを取って保護者の考えや思いを知ったり、改めて園児の姿から保育プログラムや援助について省察を重ねる。

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【設備整備、遊具・教材の充実、教員の教育・研究環境の整備】	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○法人と連携した設備整備の安全、維持管理、充実のための点検、整備、拡充を行う ○法人と連携して園児の育ちに適した遊具、教材の充実を行う ○教員の教育、研究のための環境の充実を行う 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新年度を始めるにあたって、教員で園庭の木製遊具（ツリーハウス、倉庫、小屋、雲梯、机、椅子、ベンチ、丸太の壁、平行棒、六角デッキ、トンネルなど）に柿渋（防虫、防水、防腐の効果）を塗った。また、園庭の水はけを良くするために樫所（65箇所）の蓋を開けて葉や泥を取り除く作業を行った。 ・年一回、総務・施設管理課、聖和キャンパス事務室に連絡をとり、保育室、ホール、職員室のワックスがけを行っている。また、デッキ部分に関しては教員でワックスがけを行っている。 ・週一回の頻度で砂場の衛生を保つために、砂場全体を下から掘り起こし細菌（嫌気性菌）の増殖を防ぎ、滅菌に努めている。また、樫所や溝が詰まらないように定期的に清掃している。 ・保育開始前に、教員が複数人のグループに分かれて、園庭全体（裏庭、池を含む）、小屋、倉庫や遊具の状態を目視のみならず、実際に動かしたり、上を歩いたり、触ったりして安全の確認に努めている。 ・園庭の園児が活動する範囲内では、特に危険なもの（鋭利な枝、棘や毒性のある植物など）の有無を確かめ、安全確保に努めている。また、ハチやイラガなどの虫や木の実を食べにくるカラスが見受けられる時には、教員で情報を共有し、それらの動向に気を付け、ハチの巣やカラスの巣があった場合、早急に総務・施設管理課に報告し、撤去してもらうと同時に、園児に危険が及ばないように保護者にその都度伝えている。 		

- ・園庭には季節に応じてハーブ（ラベンダー、レモンバーム、カレブプラントなど）を植え、植物遊びや製作・描画活動、ままごと材料など園児の活動に用いている。
- ・園児、保護者が目にする所に、四季折々の植物を飾っている。
（春期：ガーベラなど 秋期：キキョウ、飾りトウガラシ、カランコエなど
冬期：シクラメン、ポインセチアなど）
- ・年間を通して、園児が植物の観察をしたり世話をしたりしながら、身近な自然に興味関心が持てるように、植物栽培を保育に取り入れている。
年少組）夏期：オクラ
年中組）夏期：アサガオ
年長組）春期：キュウリ、スイカ、トウモロコシ、オジギソウ、フウセンカズラ
全学年）春期：サツマイモ 冬期：チューリップ、ヒヤシンス、クロッカス
- ・春期に園児と保護者でサツマイモ苗植え（約 540 株）を行い、継続して水やり、草抜きなどの世話をを行った。それに伴い、サツマイモがよりよく生育するように教員が 5～6 月半ばまで毎日水やりをし、5～8 月半ばまで草抜きを行った。
- ・園庭の樹木や草花は、日々教員が水やり、草刈り、追肥などの維持管理に努め、随時、総務・施設管理課に相談し、大きく成長した樹木を剪定・伐採、繁茂した草の刈り取りなどをし環境を整えている。
- ・園内（保育室、ホールなど）や園庭（自然環境、遊具など）の保持は教員のできる限りのことを行い、随時、施設部、聖和キャンパス事務室と連絡を取り、修繕を行っている（デッキ・保育室やホールの床、ツリーハウス、トランポリンの外側布、木製遊具の登り網、木のトンネルの上部、ベンチ、園庭の時計、図書コーナーのブラインド、保育室カーテン、トイレ、電子錠など）。
- ・保育室（6 部屋）、職員室、会議室、ホールのエアコンを取り換え、園内の電球を全て LED にした。
- ・保守点検に関しては、定期的に行っている（AED、冷蔵庫、防火水槽、屋上点検、防鼠防ダニ検査、ピアノ調律など）。
- ・園児が日常的に使用する製作教材に関しては、教材倉庫や保育室に付随している教材庫に確保され、適宜補充している。
- ・母の日やクリスマスには、園児がプレゼント製作で使用する教材（木材、布類、包装紙、リボン、レース、ビーズなど）を教員が検討し購入した。
- ・保育室や図書コーナーの書籍は定期的に各教員が入れ替え、陳列を行い、適宜、園児にふさわしい内容のものを吟味、選別し、購入している。今年度は月刊絵本（福音館書店）54 冊、ねずみくんの絵本シリーズ（ポプラ社）28 冊、やなぎむらのおはなしシリーズ（福音館書店）6 冊などを購入した。
- ・情報共有ツールとして、全 8 クラスで使用できるように iPad を 6 台購入した。
- ・教員全員で園内研修を行った。
内容）幼稚園が大切にしている主な活動、保育に用いている歌・わらべ歌など、聖書を物語ること（小見のぞみ 聖和短期大学）、降誕物語について
- ・各教員が「私立幼稚園教員子育て支援研修」などに参加した。
 - ・「保護者と共有、共感する子どもの遊び」
玉川大学准教授 田澤里喜
 - ・「誕生からの乳幼児教育を考える～3 歳未満児を中心に～」
神戸大学大学院教授 北野幸子
 - ・「幼児教育と小学校教育の円滑な接続のあり方～遊びを通した幼児期の学び

	<p>をつなぐ～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名古屋学芸大学教授 津金美智子 「カリキュラム・マネジメントについて」 兵庫教育大学大学院特任教授 浅野良一 ・「障害児保育」 玉川大学教授 若月芳浩 ・「新教育要領から見る3・4・5歳の姿 AIに負けない力を育む保育」 お茶の水女子大学名誉教授 内田伸子 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートでは、問8「幼稚園は、補修・修繕等を含めた教育環境設備の点検、整備を適切に行っている。」に関して、52.9%が「強くそう思う」、41.8%が「どちらかといえばそう思う」という結果であった。これは、今年度は、デッキの工事や、エアコンの入れ替え、LEDへの移行など幼稚園が法人と連携して迅速かつ円滑に工事・改修が進められたものの、園庭の木製遊具や小屋に劣化が顕著に現れ、修繕までに時間を要したためであると思われる。 ・教員アンケートでは、問8「幼稚園は、保育者の教育・研究の為の環境(学会・研修会への参加も含む)づくりに努めている。」に、53.3%が「強くそう思う」、40.0%が「どちらかといえばそう思う」、「あまりそう思わない」が6.7%となった。これは、園内研修やその他の研修会に参加していても、教員の雇用形態の関係で勤務時間が異なっていたり、預かり保育を実施している上で、それに携わる教員がいたりする現状、一人ひとりが保育の質向上のために努力していても、研修会の内容・成果を共有する時間が十分にとれていないことが原因ではないかと思われる。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○施設整備の安全、維持管理 <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き法人との連携を円滑に行い、施設整備の安全、維持管理に努めると共に、教員各々が幼稚園の豊かな自然環境などを保持及び向上させるべく意識を高める。 ○遊具、教材 <ul style="list-style-type: none"> ・教員が集う会議毎(教師会、学年教師会など)に現在の園児の姿を考慮しながら、園児に適した遊具、教材について見直す機会を持つ。 ・既存の遊具、教材に捉われず、各教員レベルで視野を広げ、新たなものを取り入れるべく意識を高める。 ・木製遊具に関しては、教員が丁寧に扱ったり、柿渋を塗ったり、朽ちないように手入れ・掃除をしている。しかし、木は腐っていくものである。木が朽ちるといことも、園児にとっては体験を通した重要な学びに結び付けられる。木製の遊具は、使用年数に限りが出てくるものであるが、園児が木に直接触れ、木のぬくもりを感じ、五感を通した経験を重ねるためには重要な環境である。預かり保育を含めた保育がある日には、取り壊しや修繕のための工事を行うのは、園児の安全確保のため難しい。そのため、修繕までに時間を要することとなっている。保護者にもこれらの理由も含めて、ご理解いただくよう伝えていく。 ○教員の教育、研究のための環境の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・各教員で参加している研修会のレジュメや報告書を見直したり、研修会に参加した教員に折に触れ話を聞いたり、情報共有ツールを用いたり、積極的に保育の質向上のために奮励する。様々な立場の教員がいる中で、時間の制限や、場を設ける事の難しさはあるが、園全体でこの問題に取り組む。

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>保護者との連携 【信頼関係を深め園児の育ちについて共に考える】</p>	<p>自己評価</p>	<p>B</p>
<p>目標</p>	<p>○園の教育方針について理解を深め、園児の心身の健全な発達を願い、家庭との連携を図る</p>		
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本園は保護者が園児を直接送迎するので、教員と保護者が話をしやすい環境にある。その特色を活かし、園児について話をすることを日常的に行っている。昨年度に引き続き今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止のために家庭訪問は中止した。その分、保護者との関わりを降園後一人ひとりに時間を取り、園児の様子を伝えるようにした。 ・昨年度中止となったクラス懇談会は、感染予防対策を徹底し行った。クラスの様子や園児の様子、園の願い、保護者の思いなどを伝え合う場を設けた。欠席した保護者にも後日時間を設け、懇談会を行った。 ・園生活の理解につなげるため、正門のボードに園児の様子やエピソード、園児が興味を持っている事柄、園の自然物、行事などについて毎日記入し、保護者が園児のことや園について知ることが出来るようにしている。 ・降園時、教員が保護者全体に向けて一日の活動や園児の姿、出来事、願いなどを伝えている。それによって園児への思いを保護者と共有している。 ・預かり保育利用の園児にも確実に伝達事項が伝わるように個人的に対応している。また、園児の様子なども定期的に伝わるように心がけ、保護者の安心につながるよう努めている。 ・園児の誕生日を全教員で把握し、お祝いの言葉を掛けている。園児も保護者も愛されていることを実感し、喜びのときを持てることを大切にしている。 ・Instagram や園児連絡アプリで園生活の様子や伝達事項などを写真や動画を交えながら発信し、具体的に伝えている。 ・新型コロナウイルス感染症拡大予防対策に努めた上で、保護者と共に個人懇談、保育参観、運動会、クリスマス礼拝祝会を行うことができた。園での様子を具体的に知ってもらうことで、園児一人ひとりに寄り添った援助や願い、育ちを共に考え合い、保護者の安心につながる機会となった。 ・園と家庭との連携、見聞を広めることを目的とし、園児の心身の健全な発達、保護者が心穏やかに過ごせるひとときを願い、保護者会活動の一環として講演会を開催した。 ・新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、分散降園や分散での園庭開放、行事などでも順次降園を促し安心した環境で過ごせるようにした。 ・安全に子どもを送迎できるように、分散登園降園に伴い、駐車場利用時間を細かく設定し、保護者と共に協力している。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートからは問 10「幼稚園は、日頃から子どもたちの様子を保護者に伝え、また、保護者からの話を聞き、共に子どもの育ちを支えている」に関して「強くそう思う」が 55.5%、「どちらかと言えばそう思う」が 35.1%、「あまりそう思わない」が 7.9%、「まったくそう思わない」1.6%となった。一方で、教員アンケート問 9「幼稚園は、日頃から園児の様子を保護者に伝え、また、保護者からの話を聞き、共に子どもの育ちを支えている。」に関して、「強くそう思う」が 66.7%、「どちらかと言えばそう思う」が 33.3%となった。こ 		

	<p>のように、保護者と教員の思いに差異が見られる。これは限りある時間の中で、教員は保護者と連携を取り合っているが、保護者の中には物足りなさを感じていると考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 近年、視覚的な情報が保護者に伝わりやすいと感じている。直接話をするに加え、写真や動画を配信することで保護者に園児の様子がより伝わりやすくなるため、Instagram や園児連絡アプリなどを活用し、園児の様子を写真や動画を使って具体的に配信していきたいと考えている。しかし、個人情報保護の観点から、園児の様子を発信する難しさがある。そのため、抽象的な写真や動画の情報になりやすく、保護者の満足度が低いと考えられる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> 近年、預かり保育を利用される保護者が増えてきており、降園時に伝えているクラスや園児の様子を伝えることが難しい状況にある。限りある時間の中で、教員は保護者と連携を取り合っているが、保護者の中には物足りなさを感じていることを一人ひとりが認識し、さらに意識的に歩み寄れるように努力する。 Instagram や園児連絡アプリなどを活用し、視覚的にも園児の日々の姿を保護者がさらに知り、感じられるように個人情報保護の観点から個人を特定したものを掲載できないことに関して園として模索していく。 園児を中心に考えることを最も大事にし、教員と保護者が共に園児の育ちを支えていくという意識が持てるように、教員から保護者に継続的に働きかけ、連携を深める。

評価項目 【テーマ】	安全管理(新型コロナウイルス感染症対策) 【日常の健康管理、疾病予防の取組、園医との連携による健康管理・疾病予防の取組、新型コロナウイルス感染症予防への取組】	自己評価	A+
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○園児一人ひとりの健康状態を把握し、疾病予防に努める。 ○教員の対応できない怪我、疾病等について園医に相談して最善の対応をする。 ○新型コロナウイルス感染症の感染予防に努める。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> 園児生活調査表(毎年度保護者が記入)にて、園児一人ひとりの健康状態、持病、身体的特徴、既往歴などを把握し、特に身体的・精神的特徴を持った園児(痙攣、心臓病、発達障害、アレルギーショック症状、肢体不自由等)については、会議等で定期的に成長や課題について話し合い、必要な対応・援助について全教職員が共通理解している。 伝染病(溶連菌感染症、流行性胃腸炎等)などで、欠席者増加の兆候が見られた際には、園医に相談の上、保護者に状況を伝えている。尚、怪我、流感、伝染病に関しては、全国、地域の状況を捉え、意識して予防に努めるように全教員で共有している。 園児の健康状態について、教員が登園時に園児の視診を行い、保護者からも随時話を聞き、必要に応じて直接園児の健康状態を把握している。 保育中は、園児の体調の変化に目を配り、検温・保護者に連絡等を行っている。降園時、帰宅後も保護者と連絡を取り、園児の健康状態の把握をしている。また保育中には、園児の状態に応じて保健館と連携し、指示を仰いでいる。 園児が心身ともに健やかに過ごせるように、受診している医師の診断、園医に相談した上で、受け入れを行っている。また、特定の伝染病(インフルエンザ、水痘等)に罹った園児に対しては、医療機関で診断を受けた上で、「登園許可証」を提出いただいている。 園医による「ほけんだより」を配布し、その中で、園児の保健衛生にかかわる 		

事柄（経験値のこと、子どもの新型コロナウイルス感染症等）を取り上げ、医師の目線・立場から最新の医療情報や、医学的な視点からの切り口による見解を伝えつつ、保護者自らが疾病予防や健康的な生活の向上に努めようとする意識を高めるきっかけづくりをしている。

- ・アレルギー対応者には、園で提供しているおやつ、食事、飲み物に関して、原材料表(産地、製造ラインを含む)を配布し、必要に応じて代替・除去等の対応を行っている。
- ・保護者のみならず、園児については保育の中で「手洗い、アルコール消毒」「好き嫌いなく食事をする」「衣服による体温調節、体調管理」など、望ましい生活習慣が身に付くように話し合っている。
- ・その時々園児の心身の状態を見て、保育後や週末の過ごし方など、保護者に伝えている。
- ・新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を考え、進級式・入園式は、人数を制限し、分散した形で行った。
- ・園児や保護者、教員など幼稚園に入館するものは、「発熱や風邪の症状がある方、または症状が無くなってから2日以内の方」「海外から帰国・入国し、2週間が経過していない方」「新型コロナウイルス感染症罹患者と濃厚接触した方」は入館を自粛していただいている。
- ・原則として、保育室のドアや窓は全開にし、常に換気ができている状態で過ごしている。暖房が必要な時には、ガイドラインに則り、窓の開閉を行い、換気の基準を満たしながら健康に過ごせるように努めている。
- ・登園時に「園児健康状態チェック表」（体温、咳、鼻水、嘔吐、下痢等の有無）の提出を徹底し、健康状態の把握に努めている。また、感冒様症状（熱、咳、鼻水等）で欠席の園児に関しては、症状消失後 48 時間経過してからの登園と、「感冒様症状に関する届」を提出いただいている。また、ガイドラインに則り、同居家族に感冒様症状がある場合も登園を控えるようにしている。その際には、同居家族の症状が消失すれば登園可能にしている。尚、感冒様症状で欠席した園児は出席停止扱いとしている。
- ・登園時の保育室への入室時、活動毎（自由活動後、排泄後、外遊び後、食事前等）、咳・くしゃみなどの後にも、手指のアルコール消毒を行っている。
- ・手洗いの際には泡状石鹸・ペーパータオルを用いる。また、園児・保育者ともに個人で使用するマスク専用のケースを人数分確保している。
- ・園児の活動については出来るだけ園児が密集しないように環境を整える。また、使用する遊具・教材の消毒を出来る限りする。
- ・園児が座って活動する際、椅子の間隔を空けて座り、大きな声で歌うことを控え、手遊びなど顔付近に手指がくるような遊び・活動を避けている。また、栽培で採取した野菜や園庭の果実等は園児が食することはやめている。
- ・今年度は基本的に、年長のダッドレーチャペルやホールでの礼拝は、室内換気量を勘案し、3クラス合同で礼拝することができた。同様に、年長と年中の2クラスずつ、ホールにて誕生会ができた。しかし、緊急事態宣言の期間や、また、新型コロナウイルスの感染状況に合わせて、1クラス以上が集まる活動は控えるなど、保育形態・内容を工夫しながら行っている。
- ・昼食やおやつ時の形態は園児が対面になることを避け、同方向で前後左右の間隔を空けて食事をしている（必要に応じて衝立を使用）。
- ・話し合いや礼拝、昼食、おやつ時の活動等、園児が同じ所にいることが続くような活動の際には、必ず iPad で写真を撮り、全体の園児の座席・位置情報の記録を残すようにし、万が一陽性者が出た際に対応できるようにしている。

- ・絵本貸し出し(週1回)の絵本返却時には、一度、絵本を預かり72時間経過してから絵本棚に戻している。
- ・保育後は園児の手が触れる場所(ドアノブ、レバー等)を消毒している。
- ・園児には手洗い消毒の大切さ、密を避けること等新型コロナウイルス感染症予防対策を話し合いなどで伝えている。
- ・保護者には「新型コロナウイルス感染症の対応について(第1～10報)」を配布した。
- ・降園時、教員が連絡事項や伝達をする際、デッキ(外の開けた空間)で保護者に話をしている。園児、保護者共に密集・密接を避けるため、時差降園を実施している。
- ・来園する保護者にはマスクの着用をお願いし、集まる際には手指の消毒や会話を控えるよう協力を仰いでいる。
- ・保育後の園庭開放は、在園児は分散で実施している。朝の園庭開放を在園児の弟妹親子に対して実施している。また10月には、関西学院の新型コロナウイルス感染症に対応する活動制限レベルが「レベル2(一部制限)」に引き下げられ、幼稚園の園庭開放の制限内容も緩和された。一般の外部の方の園庭開放も可能となり、近隣の親子での利用者も見られた。
- ・入園式、進級式、誕生会、始園日、終了日、保育参観日、運動会、芋ほり、焼き芋、愛餐会、クリスマスなどの行事は、感染状況やガイドラインに伴って実施形態を変更した。保護者が座る椅子は使用前後に消毒をし、間隔は前後左右1.5m以上空けている。
- ・1学期の散歩・遠足の活動は延期とした。2学期に年少・年中組は、関西学院聖和キャンパスを散歩し、年長は甲山遠足、千刈デイキャンプ(日帰り)を実施した。
- ・千刈デイキャンプ(日帰り)を12月に実施した際に、行き帰りのバスは換気を徹底し、2席空けて園児は座るようにし、マスクを着用して出来る限り会話がないように努めた(肌やアレルギーの関係でマスク着用が難しい園児の対応を学校医と相談している)。
- ・家庭訪問、夕涼み会、夏季キャンプ(一泊)、プール遊び等は実施していない。
- ・1学期のクラス懇談会はホールにて、今年度は1クラスずつ実施できた(換気、保護者が着席するパイプ椅子の間隔の徹底)。
- ・保護者会活動については、クラス親睦会、サークル活動を行っていないが、役員会、学年ごとの少人数での保護者会講演会、クリスマス準備保護者会を、リモート開催の形で実施することができた。
- ・幼稚園説明会は参加人数を制限する為に複数回に分けて実施した。
- ・個人懇談会や、入園面接など、保護者と面談する際には、飛沫防止のための衝立を使用している。
- ・9月に園児1名に、新型コロナウイルス感染症による陽性者が出た。更なる感染の拡大防止と園児の安全を考え、トイレを共有していた2クラスを学級閉鎖とした(6日間)。早急に教員で消毒等の諸作業、園児の健康観察に努めた。保健所と連絡を取り、行動履歴調査の結果、8名の園児が「念のためPCR検査」の対象となった。また、教員は対象者ではなかったが、保育を安心・安全に再開するために、関わりのあった教員は自宅待機とし、PCR検査を受けた。園児、教員全員の陰性が確認でき、保健所、関西学院学校医、幼稚園園医と検討・確認し、保育再開とした。

	<p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートでは、問 12「幼稚園は、子どもたち一人ひとりの表情や様子等から体調変化に気づき、把握に努めている。」において、「強くそう思う」、「どちらかといえばそう思う」と答えている保護者が 91.6%と肯定的な回答が多かった。しかし、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」と答えている保護者が 8.4%だったことにも着目したい。各担任はその時々の子の園児の心身の状態を見て、保育後や週末の過ごし方等を保護者に伝えるようにしており、体調に変化があった際には早急に保護者に連絡をしている。また、新型コロナウイルス感染症や伝染病等の状況にともなって、保護者に状況説明を、園時連絡アプリや降園時のアナウンス等で伝えているが、幼稚園側の取組が一部の保護者には十分伝わっていないと思われる。 保護者アンケート問 13「幼稚園は、子どもたちの健康管理、疾病予防に努めている。(園医と連携の上)」では、98.0%が肯定的な回答をしている。これは、園児の健康状態など生活調査票で確認していることや、また、日々の園児の様子や保護者との会話から把握したことを教員間で共有し、必要な場合には園医と相談し連携して保育に努めていることが、保護者に理解されている結果だと思われる。 保護者アンケート問 14「幼稚園は、新型コロナウイルス感染症の感染予防(手指消毒、遊具の消毒、換気、分散登園など)に努めている。」に関しても、96.8%の肯定的な回答を得た。これは、日常の保育や行事等を行う上での感染症予防対策の取組や、新型コロナウイルス感染症の陽性者が出た際の幼稚園側の対応等、保護者が理解していることが上記の認識につながっているのではないかと推測される。 教員アンケートでは、問 11「幼稚園は、園児一人ひとりの表情や様子等から体調変化に気づき、把握に努めている。」に関して、86.7%(前年比 6.7%増)が「強くそう思う」、13.3%が「どちらかといえばそう思う」となり、教員間での園児の体調管理の意識がより高まっている結果となった。また、問 12「また、怪我、疾病等の対応については園医に相談の上、行っている。」に関しては、80.0%(前年比 11.2%増)が「強くそう思う」、13.3%(前年比 5.5%減)が「どちらかといえばそう思う」となった。これは、教員間で日常的におこる園児の体調や精神的な変化の共有とともに、園医に相談して対応している事柄なども共通理解できたことが理由として考えられる。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各クラス、引き続き保育の中で「手洗い、アルコール消毒」「好き嫌いなく食事をする」「衣服による体温調節、体調管理」等、望ましい生活習慣が身に付くように話し合い、園児自身の病気予防や対策等、安全管理への意識が高まっていくように援助する。 これまでと同様、園児の表情や様子から気がついた体調変化や健康状態を細やかに保護者に説明し、家庭に戻ってからの様子にも配慮し、幼稚園と保護者が連携して園児の健康管理に努めていく。 園医による医師の目線・立場から最新の医療情報や見解が書かれている「ほけんだより」を配布し、保護者自らが新型コロナウイルス感染症や病気に対する正しい知識を持ち、また、疾病予防や健康的な生活の向上に努めようとする意識を高めるきっかけづくりをしていく。 気の緩みから新型コロナウイルス感染症予防対策の意識が低下していかないように、教員自身が予防対策の意識を強く持ち、保護者に対しても口頭での伝達や家庭通信の配布、園児連絡アプリを適宜活用しながら呼びかけていく。 これまでの取組に続き、新型コロナウイルス感染症予防対策に努め、園児や保

護者、教員の健康状態の把握をしていく。また、保育の活動内容や行事等で園児、保護者が密集することが懸念される場合は、最善の対策をその状況下に合わせて考えて、検討をしていく。その際には、検討した結果や経緯を保護者にも十分に説明し、幼稚園と保護者が双方に共有、理解ができるように努める。

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

今年度は、教員全員で学校評価を見直し、具体的な課題意識をもって保育を行うことができるよう、スタートした。

評価項目としては、「キリスト教主義教育」「教育課程・指導」「教育環境整備」「保護者との連携」「安全管理」の5項目を選定し、保護者・教員アンケート共に、全ての項目で概ね肯定的な結果が得られた。

昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症の流行を防ぎ、園児が安全に園生活を送るために、保育形態の変化や保育内容の見直しを図ることが多くあった。今までできていたことに制限がかかり、保護者参加の大きな行事の中止や、行事への保護者の参加人数に制限を設けなければならず、園生活の様子を見ていただく機会が十分に持てなかった。そのような中でも、保育者は改めて園児の姿を捉え、日々の園生活の中での集団の中での育ちや、個々の心の育ちに目を向け、保護者に伝えていくことに重きを置き、取り組んだ1年であった。しかし、十分にその取組ができていたとは言えない。園児の健やかな成長は、幼稚園と保護者が車の両輪のように連携してこそ成り立つものである。次年度も特に重点項目として「保護者との連携」に取り組んでいきたい。

新型コロナウイルス感染症の感染防止を中心とした「安全管理」の取組については、園児のためにできることを細やかにを行い、園児の健康的な生活を保障することができたと考える。今後も状況に応じた対応を継続していく。

「キリスト教主義教育」「教育課程・指導」「教育環境整備」に関しては、各項目の継続的な努力と、具体的な取組を実現していくことが必要である。

園児一人ひとりが、自主的に、共に、喜びをもって園生活を送ることができるように支え導く保育を、教員全員でできるようにする。そのために、対話を大事にしつつ、各項目の改善に取り組んでいきたい。

2021年度の評価をふまえて2022年度に予定している評価項目、テーマ等

- ・キリスト教主義教育
- ・教育課程・指導
- ・教育環境整備
- ・保護者との連携（重点）
- ・安全管理

第三者評価／学校関係者評価

・全体としてきめ細やかな配慮のもとに教育実践を行おうとしている努力がうかがえます。特にCOVID-19感染症対策に関しては、子どもの安全を守るために保護者に協力を呼びかけ、様々な手立てを用いて徹底して感染症の予防と防止に努めており、その成果が表れていると思います。今後も国内外の就学前教育施設での感染症対応に関する情報を敏感に捉えながら、関西学院幼稚園独自の工夫を加えた予防と防止策に取り組んでいただきたいと思います。同時に、これらのことによって、教育

実践上、従来できていたことができなくなったこともあると思いますが、そのことをマイナス面として捉えるだけでなく、教育実践面での工夫を行っていることを評価します。引き続き現在の子どもが置かれている環境から学ぶこと、またその中でできることを工夫し、教育内容の充実を図る努力を続けていただきたいと思います。

・評価項目全般にわたって、集団の中の「個」を尊重する姿勢、「個別性」が強調されており、これが関西学院幼稚園の特徴のように見受けられます。このことはこれまでの関西学院幼稚園の学校評価内容からも明らかで、自己評価として非常に特徴的であり、関西学院幼稚園の独自性として評価できます。しかし一方で、このままでよいのかという問いを投げかけて自己評価することも必要ではないでしょうか。すなわち、個人の成長を大切にするという基本方針は重要ではあるが、それだけでよいのかということも一度検討していただきたいと思います。集団で育つ意味に注目して教育実践を行うことは個の成長と共に、就学前教育の重要な視点です。昨年度の学校評価の第三者評価において、集団としての成長という視点も必要ではないかということを描きました。そのためか、今年度の記述の中にはわずかに集団に意識した記述がありました。例えば、評価項目「教育課程・指導」の評価として「個と集団の両面を意識し保育を行う意識が浸透してきた」という記述があります。しかし、その文章の前の記述には教員対象のアンケート結果で「一人一人の興味・関心を高める」「個人に沿った援助を行っている」という項目の回答率が高いことが示されており、この文脈から「個と集団の両面を意識した保育」への意識が浸透してきたという結論になぜむずびつくのかわかりにくく、アンケート結果は実証的な裏付けとなっていません。ここで示されたアンケート結果は、個人を大切にされた保育の裏付けとなっています。その他、評価項目「キリスト教主義教育」をはじめとして、いたるところに「一人ひとり」という言葉が多用されているため、関西学院幼稚園の保育の特徴は、「個」を尊重しているということがよくわかります。これは戦後しばらくの間、日本の就学前教育の底流にあったいわゆる「集団主義」に対して、「個」を尊重することの重要性をキリスト教主義の保育理念に重ねて主張してきた関西学院幼稚園の教育実践（関西学院幼稚園の前身である聖和幼稚園からの流れを汲んだ教育実践）の歴史的背景に起因していると思われます。かつては、教育における個の尊重という教育的立場は注目に値しました。しかし、現在、教育に求められていることは、あまりにも個の尊重、個別性に傾きすぎてはいないか、もっと他者と協同的に学び合うことが大切ではないかという反省であり、それは現在の世界の教育課題やこれを受けてわが国の就学前教育の中で強調されている「協同性」への注目などに表れています。これらを意識して教育実践を行っておられるなら、そのことが学校評価の中でわかるように記述していただきたいと思います。

関西学院幼稚園として出発して10年以上の時間が流れた今、改めての教育課程・指導の内容、およびその他すべての項目にわたって、評価の仕方を含め再検討をしていただきたいと思います。その結果として、確固とした理由のもとに「個」を尊重することを関西学院幼稚園の特徴として打ち出すのであればそれはそれでよいと思います。

・来年度の重点的評価項目に「保護者との連携」を掲げたことは意味があることだと思います。関西学院幼稚園の自己評価の指標として、保護者を対象としたアンケート調査の結果が示されていますが、今後も保護者対象のアンケート調査結果を評価指標の1つにするのであれば、アンケート項目の見直しが必要ではないかと思います。そのためには、例えば、保護者が関西学院幼稚園に何を期待しているのか、その実態把握も必要ではないでしょうか。このことは、保護者のニーズにおもねるためではなく、今後、保護者との連携を図り、教育実践をより充実させるために必要なことではないかと思います。

コロナ変異株に対する予防対策と長きにわたる緊張が強いられる中、教職員が一丸となり一人ひとりの子どもの育ちを考えた保育を継続されている点をおおいに評価します。

【キリスト教主義教育】

・アンケート問1「教員は、キリスト教保育の理念を共有している」について、教員の86%以上が「強くそう思う」という結果に表れているように、昨年度の第三者評価で指摘した教員間でのキリスト教保育の理解を深めるための努力をされたことが顕著になったことは、おおいに評価できます。

・月2回、土曜日の聖和キャンパス内ダッドレーチャペルでの静寂な雰囲気の中で行う礼拝のような貴重な経験の継続をはじめ、多くの方策が行われていることは優れています。

・お誕生会における礼拝ではお休みの友達のことを覚えて祈る子どもたちの姿から、人を思いやる芽が育まれていると思います。また、保育者がクラス内でキリスト教物語をストーリーテリングし、子どもたちがその話を静かに聴きイメージを共有する話合いの場では、子どもたちは物語の登場人物の気持ちになり自らの言葉で語る背景に、教員のイエス・キリストと真摯に向き合う姿が子どもたちに伝達していると感じます。

【教育課程・指導】

・教員自身が園児一人ひとりの興味・関心を高め、主体的・意欲的に活動ができる保育を目指していることは教員アンケート問3の結果からも分かるように、昨年度より「強くそう思う」が約18%増とかなり改善が進んでいます。これは保護者アンケート結果からも裏付けられています。

・各教員が行っている年齢や発達に沿った壁面の掲示物、棚に置かれた絵や花、自由活動で使用する遊び道具、木工用具等の環境作りは、教員の日々の努力によるもので今後も期待します。

【教育環境整備】

・環境整備として具体的な項目と今後の方策が詳細に記載されていますので、改善されると同時に保護者への細やかな伝達を期待します。

・教員の園内研修に加え、「私立幼稚園教員子育て支援研修」に参加された内容が明確に示されていたように、教員自ら新しい研究に取り組む姿勢がみられたことは、おおいに評価できます。ただ、参加の難しさとして研修会の内容・成果を共有する時間が十分にとれないことが記述に見られますので、今後の改善を期待します。

【保護者との連携】

・コロナ禍において教員と保護者間でコミュニケーションが取りにくいことを把握し、クラス懇談会の開催や正門のボードへのメッセージ等、教員の努力の成果がみられます。

・保護者アンケート問10「幼稚園は、日頃から子どもたちの様子を保護者に伝え、また保護者からの話を聞き、共に子どもの育ちを支えている」では、8.4%の保護者に不満がみられました。Instagramや園児連絡アプリをさらにうまく活用することを期待します。

【安全管理（新型コロナウイルス感染症対策）】

・保護者アンケートからも教員アンケートからも高い評価を得て、テーマに対する目標を達成できていたことは、おおいに評価できます。

・様々なコロナ対策を日々行うと共に、日頃から教員間で対応マニュアルを共有できていること、また保護者への伝達が十分に行き届いた証だと思えます。今後も、園児の体調変化の共有、園医への相談などをさらに緻密に行うことが大切といえるでしょう。

・今年度もコロナ禍による様々な行動制限が求められるなか、関西学院幼稚園の教員が優れたチームワークで、子どもを主体とした教育・保育を実践したことがわかりました。具体的な取組を丁寧に振り返り、全体をとおして適切に自己点検・評価が行われています。

・関西学院幼稚園の教育の根幹となる「キリスト教主義教育」は、毎年の評価項目として設定されていますが、昨年度と同様に「B」評価となりました。保護者アンケートの問3「幼稚園はキリス

ト教保育の考え方を保護者と共有している（日々の保育の伝達、礼拝、保護者会、手紙等）」の肯定的回答がこの数年で減少していることが要因といえますが、一方で、教員アンケートの問1「教員は、キリスト教保育の理念を共有している」について「強くそう思う」の回答が昨年度より大きく増加（24.2%増）したことは大変評価できます。教員の自己評価に満足することなく、保護者とともに保育をつくることを大切にしている関西学院幼稚園の姿勢が今回の評価結果に表されているといえます。「今後の方策」で示された取組が実践され、次年度の評価につながることを期待します。

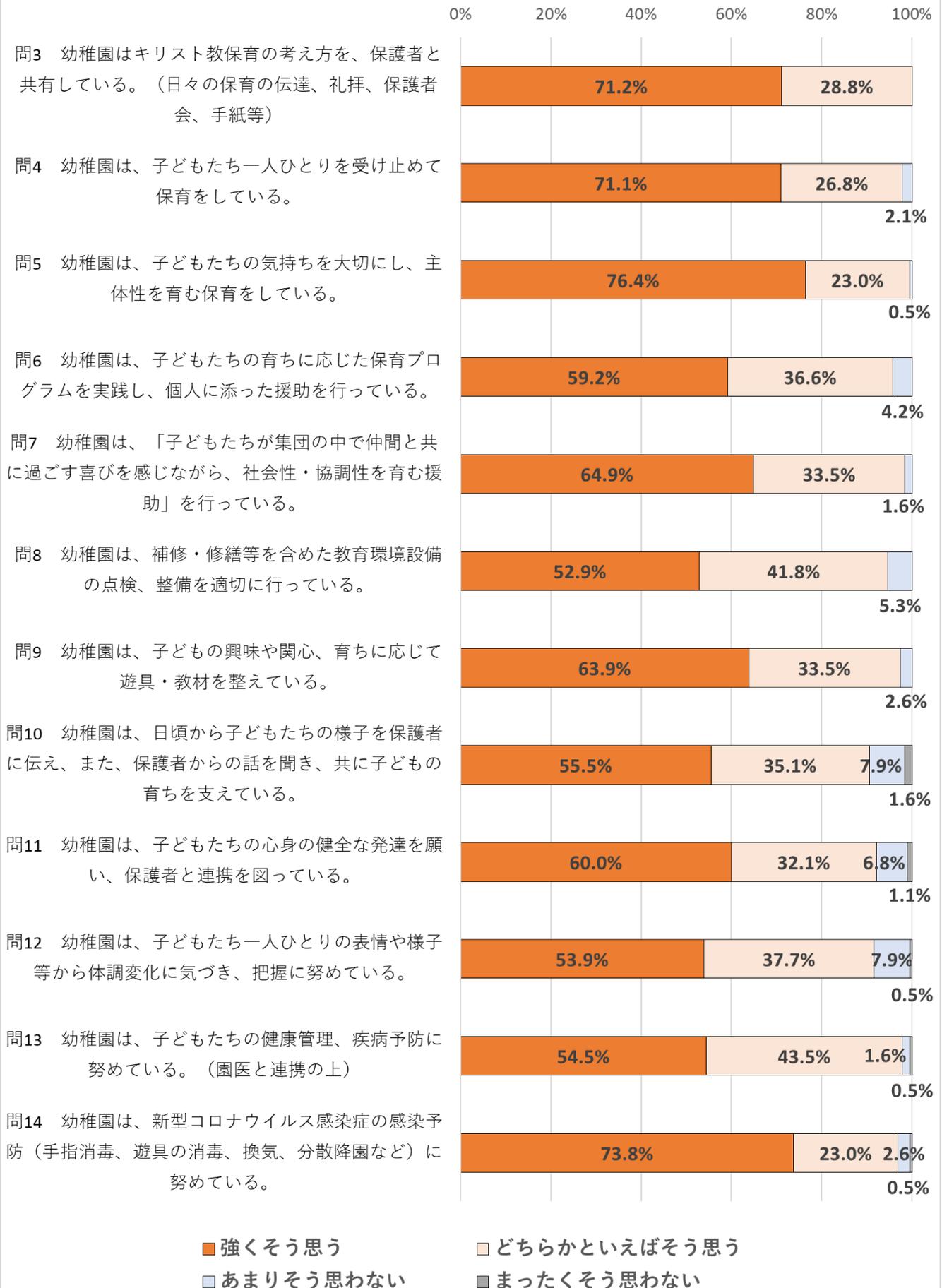
・「教育環境整備」「保護者との連携」についても昨年度と同様に「B」評価となりました。アンケートの結果は、昨年度と比較し、全体として教員の自己評価は肯定的回答が増加し、保護者の肯定的回答は減少傾向がみられます。コロナ禍により、教員の思いや願いを保護者と共有する機会が少なくなっていることも要因と考えられますが、具体的な取組として、法人と連携した設備整備、教員による日々の保育の環境づくり、研修会への積極的な参加、保護者との交流・伝達の様子等が詳細に記載されました。すべてが子どもの姿を中心においた取組であり、関西学院幼稚園の伝統を受け継ぐ教員の思いを読み取ることができます。「保護者との連携」は次年度も重点項目として設定されていますので、保護者への情報発信・情報共有をさらに充実させ、教育・保育の質向上に努めて頂きたいと思えます。

・「安全管理（新型コロナウイルス感染症対策）」は「A+」の評価が示されました。きめ細やかな配慮のもと保育が実践されたことは大変評価できます。保護者アンケートでは、問14「幼稚園は、新型コロナウイルス感染症の感染予防（手指消毒、遊具の消毒、換気、分散登園など）に努めている」について高い満足度が得られ、保護者からの信頼を深めることになっていると理解できます。今年度の自己点検・評価は、コロナ禍の困難な状況において、保育形態・内容を工夫し、一人ひとりの子どもの育ちを願いながら取組んだ実践記録でもあると感じました。教員が多くの対話を重ねた実績が、次年度の各評価項目の改善に生かされることを期待しています。

2021年度学校評価

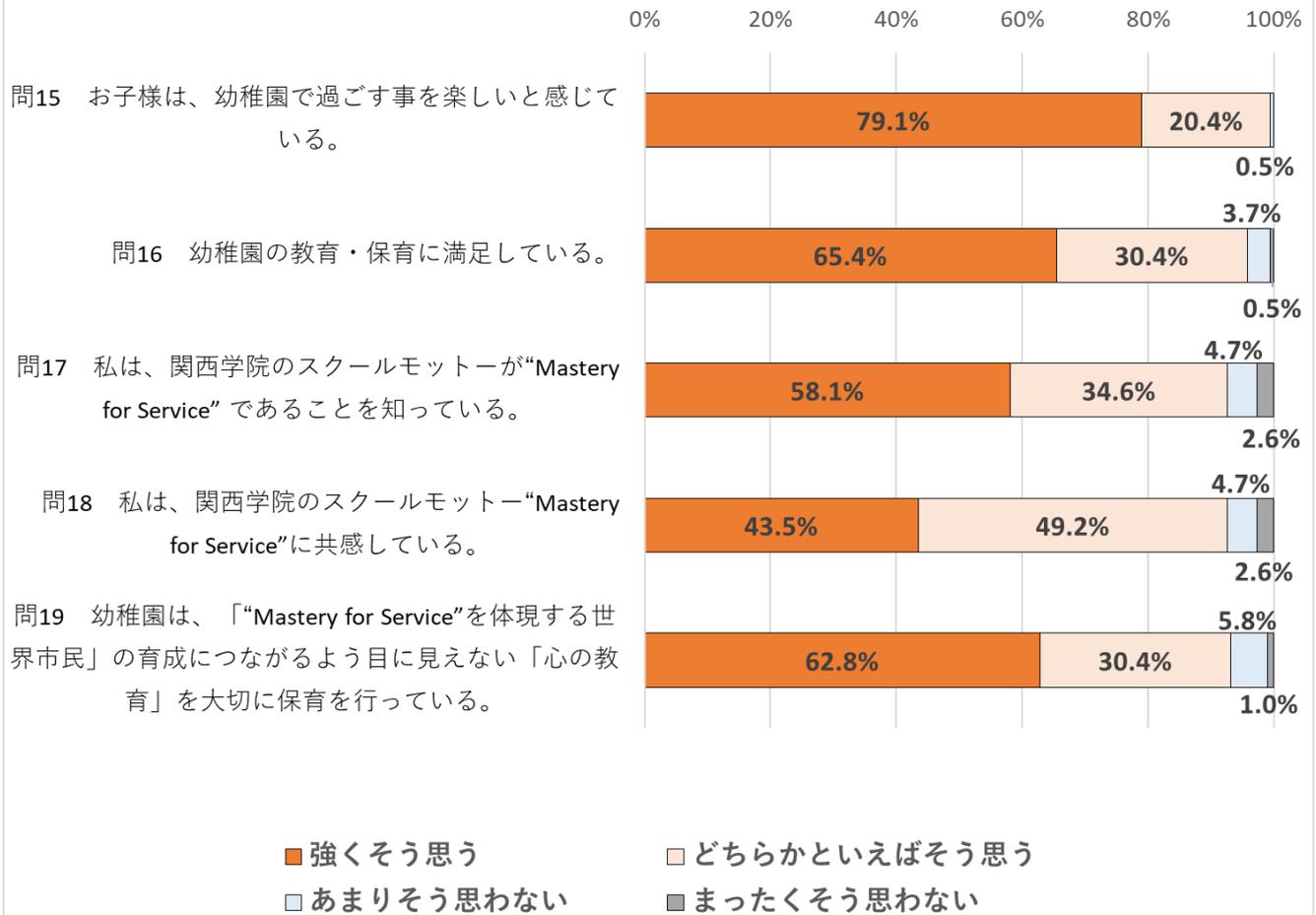
2021年度 学校評価アンケート集計結果

幼稚園・保護者（回収率 87.3% 192人/220人中 ※有効回答数191人）

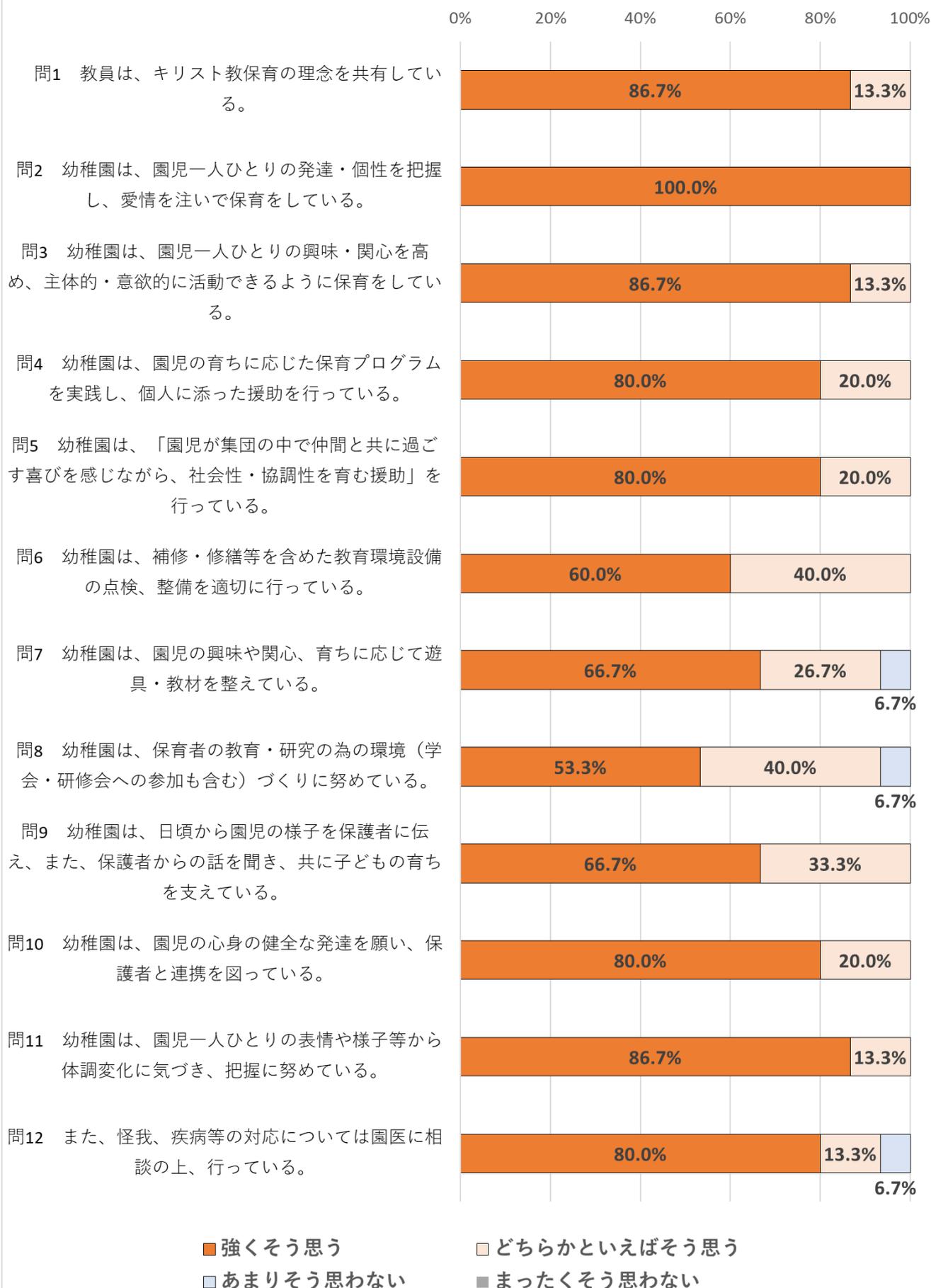


2021年度 学校評価アンケート集計結果

幼稚園・保護者（回収率 87.3% 192人/220人中 ※有効回答数191人）



2021年度 学校評価アンケート集計結果
幼稚園・教員 (回収率 100% 15人/15人中)



2021年度 学校評価アンケート集計結果
幼稚園・教員 (回収率 100% 15人/15人中)

